

パヤオ県帰国被害者へのカウンセリング スキル研修の実施 (12/14-15)

プロジェクトは、バンコク YMCA パヤオセンター (YMCA パヤオ) と一緒に、YMCA が支援をしている人身取引被害者 40 人に対してカウンセリングスキル研修を開催しました。

プロジェクトは、海外で人身取引の被害に遭い、タイに帰国したタイ人被害者が適切な社会復帰支援・自立支援を受けられるよう、被害者による被害者支援グループ (LOL: Live Our Lives) の活動を支援してきました。LOL の支援を通じて、被害者による被害者支援 (ピアサポート) は、被害者自身の社会復帰に大きく貢献していることが分かりました。そこで、帰国被害者が基礎的なカウンセリングスキルを習得することによって、被害者同士が支援し合えるようになることを目的に研修を実施しました。



チェンマイの精神病院で働きつつ、チェンマイ大学でも教鞭を執るラダワン女史

カウンセリングスキルのセッションは、HIV 感染者のカウンセリング経験が豊富なラダワン女史を招いて実施しました。ラダワン女史は、チェンマイの精神病院で看護師として働く傍ら、チェンマイ大学においても教鞭を執っています。彼女は、「カウンセリングとは何か?」といった学術的議論は避け、被害者が共感しやすい逸話やグループディスカッションを交えて、聴く・質問する・共感するといったスキルを説明しました。また、参加者の発想の転換や行動変容を促す機会となるよう、難しい状況や選択を迫られた場合でもプラスの面を見つける演習や日常的に実践したいことの計画を立てる演習も行いました。

カウンセリングスキルという難しい技法のセ

ッションでしたが、ラダワン女史が分かりやすい言葉で逸話をふんだんに交えて話したことで、参加者も新しいことを学びつつも楽しみながら参加していました。

研修参加者の 40 人の帰国被害者は全員パヤオ県ドッカムタイ郡の出身で、参加者 40 人の内半数以上が日本からの帰国被害者でした。ドッカムタイ郡は、帰国被害者が多い地域で、同郡に事務所を持つ YMCA パヤオは、帰国被害者を対象に様々な活動を過去に行ってきましたが、帰国被害者自身が積極的に他の被害者とのネットワークを築いてグループ活動を行うことはありませんでした。



DVDを使って活動の説明を行う LOL メンバー

従って、本研修ではカウンセリングスキルの他に、被害者支援ネットワークである LOL (事務局はバンコク) のメンバー 3 人を講師として招きました。LOL メンバーは、LOL の活動や自分たちが LOL のメンバーになることによって自分自身の自立だけでなく、他の帰国被害者の社会復帰や若者に対する人身取引予防にも貢献できるようになった経験を共有し、更に被害者同士が集まり力を合わせれば、政府の職業訓練や基金に申請でき社会復帰の選択肢が広がるという体験談を共有してくれました。

研修後のアンケート結果を見ると、カウンセリングスキルのセッション及び LOL メンバーによるネットワーキングのセッションに対する満足度は非常に高いものでした。特に LOL によるネットワーキングのセッションに対するコメントが多く寄せられ、「とても励まされた」「勇気づけられた」「希望が持てた」など、とても嬉しい感想

が寄せられました。更に、何人かからは、「自分たちもパヤオで LOL のようなネットワークを構築したい」とのコメントが寄せられました。

LOL の様なネットワーク構築は、本人たちのやる気と YMCA パヤオの支援と LOL の協力にかかっていますので、早速それらの団体に報告しました。

チェンライ県チェンコン郡・ウィエンケン郡 MDT を対象にワークショップの実施 (12/20-21)

プロジェクトは、2011年12月、ラオスと国境を接し人身取引の発生リスクが高いチェンコン郡及びウィエンケン郡での郡レベル MDT の設置を支援するために、MDT メンバーとして活動していくことが見込まれる両郡の関係者に対して MDT 設置に向けた研修を実施しました。

その後もチェンライ県社会開発人間安全保障省事務所がフォローアップ研修を実施しましたが、関係者の参加が芳しくなく、MDT は設置されたものの、MDT としての活動ができていないことが課題でした。

プロジェクトは、両郡の MDT が活動できていない理由に、メンバー自身どのように活動したらいいか具体的イメージが湧かないのではないかと考えました。そこで、実際にコミュニティレベルで MDT として社会問題の解決を行っているパヤオ県の郡レベルの MDT メンバーとグループディスカッションを行いました。

ディスカッションをしているうちに、NGO や政府の職員を講師として招くよりも、実際にコミュニティで活動している MDT メンバーによる話を聞くほうがいいのではないかと思い、その後 3 回の打ち合わせを行った結果、今回のワークショップを企画するに至りました。



ワークショップにて、アイスブレイキングの様子

ワークショップ 1 日目には、パヤオ県で郡レベル MDT メンバーとして人身取引事案や他の社会問題に当たる 4 名のリソースパーソンを招き、彼らの経験談を両郡の MDT メンバーに共有する形で実施しました。両郡からは、タンボン自治体の職員、警察、看護師など 31 名が参加しました。

パヤオ県ドッカムタイ郡の学校教員ナロンリット氏は、90 年代始め、同郡では、親が借金のカタに小学校も終えていない女子を売春や労働力として売る問題が発生していたことを説明しました。そして、そういった子どもたちを守るために、教員によるグループを立上げ、女子をいかに中等教育まで進学させるかということや児童虐待の問題に対応してきました。その後、同郡に YMCA パヤオが設立され、YMCA パヤオの研修に参加することによって子どもの権利等を学び、学校以外の他の団体と協働することによって、よりシステマティックに社会問題に対応できるようになったと述べました。



経験談を語るタウェ氏、他リソースパーソン、YMCA パヤオ代表のサングワン氏

同じく学校教員のタウェ氏は、MDT アプローチによって解決に至った児童虐待のケースを紹介しました。教員が、欠席が目立つ男子生徒 10 名のが気になる調べたところ、ゲームにつられ、外国人男性の家に行き性的搾取を受けていた可能性が発覚し、警察、裁判所、YMCA パヤオとの協働で、外国人男性を逮捕・訴追に追い込むことができました。

タイの行政単位であるテッサーバンの副長サムラン氏からは、MDT アプローチにより家庭内暴力に苦しんでいたモン族女性の離婚を勝ち取ったケースや、村に見知らぬカンボジア人グループ

が共同生活を営みながら農作業を行っているとの通報を受け、人身取引被害者ではないかとMDTで調べ、結果として人身取引ではないことが分かったというエピソードも紹介しました。

元教員で、現在は地元NGOの代表として活動するウォンドゥエン氏は、実際にケースの通報を受けた場合、MDTとしてどのようなステップを踏んで対応するか説明しました。

参加者は、自分たちと同じ様な立場の4人の経験談に強い親近感を持ったようで、夫と離婚したいモン族の女性をどう支援したらよいか、子沢山を望む少数民族の価値観は変えられるのかなど、具体的な質問が飛び交いました。1日目の夜は、参加者の親睦をより一層深めるために、チームビルディングゲームをしました。同プロジェクトアシスタントが一番張り切っていたのが印象に残りました。



チームビルディングゲームの様子

ワークショップ2日目は、郡レベルMDTが人身取引事案等の被害者保護のために活用できるリソースを紹介するため、チェンライ県にある男性用シェルター（長期シェルター）と子どもと家族のためのシェルター（短期シェルター）を訪問しました。男性用シェルターには、訪問時、10代後半の男の子3人が保護されており、参加者からは、騙されてタイに連れてこられた経緯からシェルターでの保護内容まで、活発な質問がなされました。短期シェルターでは、通報を受けてからセンターへの移動、センターでの支援に至るまで保護の過程が包括的に説明され、その後、参加者は施設内を視察しました。



シェルター職員（右）に質問をする参加者とウォンドゥエン氏（中央）

訪問の終わりには、参加者全員に、リソースパーソンと参加者の連絡先を記載したダイレクトリーを配布しました。この2日間で、今まで同じ郡に住みながらも一緒に活動をしたことがなかった参加者同士の距離がぐっと縮まりました。これをきっかけに、MDTとして何らかの活動が始まればと期待します。

このワークショップのもう一つの成果は、チェンコン郡に支所をもつCenter for Girlsという現地NGOを参加者に紹介できたことです。パヤオ県ドッカムタイ郡のMDTが機能している大きな理由にYMCAパヤオの存在があります。YMCAパヤオは村の組織と県の行政との連携を促してきました。そういう意味においては、近くにNGOが存在することはとても重要です。Center for Girlsのチェンコン支所も今年開設したばかりで、規模は小さいですが、MDTと共に成長していければよいので、プロジェクトとしても、フォローアップのやり方を考えていかなければなりません。

